

「いちらへ」

義豊は初めての長軀に嬉々となっていた。その傍らに就き添うのは、中里源太左衛門と本間八右衛門である。日頃より奉行衆に反目する義豊の意を受けた傳役だ。

「この合戦で大事があれば困りますゆえ、我らは殿の御傍を離れませぬぞ」

中里源太左衛門の言葉に

「御随意に」

実堯は呟くように応えた。

ふたりの敵意が剥き出しになった視線を受け流しながら

（憎まれたものよ、奉行衆とは泣かされるお勤めであるわ）

実堯は、ほくそ笑んだ。

師走の風に乗里見水軍が金谷湊を発つたのは、一日のことである。

海上七里、当面の目的地は三崎である。

当時、〈水軍〉という勇ましき言葉はない。一般的には海賊衆と呼ばれ、文字通り領主に仕える反面、勝手気ままな略奪強奪も厭わぬ気の荒い連中である。内房の海賊衆は正木通綱の配下に服しながらも、時には狼藉さえ平然と行った。度さえ過ぎねば、正木通綱も見て見ぬ振りをする。これが在地豪族の臨機応変といえよう。

この海賊衆は、既に幾度となく三崎の漁村に斥候を行っている。三浦氏支配の頃は交易を主体としていたが、北条が支配してからは、もっぱら略奪狼藉が多い。

彼らは主に夜間、三浦半島を襲う。白昼に略奪するような阿呆は一人もいなかった。そして、この略奪行為には、大きな意味がある。

これは、夜でも渡海できる実力を鍛えることに通じる。里見としてこれほど有為な軍事演習はない。

ゆえに、目益すのである。

適度な匙加減といえはそれまでだが、略奪勝手を許す采配者には、自然と彼らも従うものだ。先の品河奇襲でも、実堯は三割の見返りで手懐けている。

すべては、このような大規模行動を行うための訓練だったと云ってもよい。

訓練に至るすべての采配は、実堯が行っていた。当然、これら水軍の掌握は、すべて実堯の手の内にある。

在地豪族の力を削いで〈一統〉を志せば、これらを否定するのは当然といえる。この現実を、果たして義豊は感じ取っていたらうか。

江戸湾の喉元は、満ち干で海流が大きく変化する。

それをものともせず、風を読み、巧みに舟を操る里見水軍の力量は、さすがというよりない。六挺から八挺まで備えた櫓でさえ、労力を省くために用いることはなかった。これは、海も風も、潮目の時刻にも精通する強者だけが為せることだ。

江戸湾を奔る風は強い。

それを生かす力量があつてこそ、舟は少ない労力で最大の速力を得るのである。この技能を生かし育てたのは、紛れもない在地豪族の生活の知恵だった。

三浦半島がみるみると迫り、沿岸の村に建つ軒が視認されるほどに近付いてくる。壯観といえる光景といえよう。

このとき里見義豊は、実堯の舟に乗り込んでいた。傳役の中里源太左衛門・本間八右衛門も一緒だ。

汐でべたつく顔を撫でながら、里見義豊は食い入るように眺めていた。

「そろそろ敵の物見に気取られます。盾を殿の前に立てかけませい」

実堯の指図を受けた兵が、義豊の前に板を幾枚か立てた。

「叔父上、よう見えぬ」

不服を呟く義豊に

「矢が降り注ぎます。今より低く屈まれますように。御傍の二人は、死ぬ気で殿を守られませい」

実堯の言葉が終わらぬ間に、最初の遠弓が付近の海面に水柱を立てた。

「よいか、手筈通りに三崎湊に火を放て。品河のときと同じ手筈であるぞ」

実堯の采配に海将たちは応と答えた。

その手際は、阿吽と呼べる巧みなものであった。

+++++

鎌倉炎上(2)

夢酔 藤山